

名東区在宅医療への取り組みを聞く

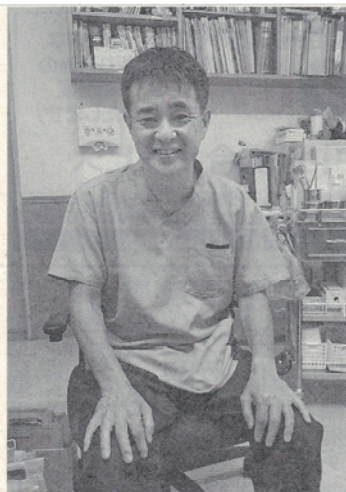
本郷クリニック 牧 篤彦 先生

2020年9月12日

名東区在宅医療への取り組みを聞く①

本郷クリニック 牧篤彦先生

名東区の在宅医療は、多職種連携が進み市内で特に充実しているが、区民にはあまり知られていない。区内の医療関係者が「オール名東」で取り組む在宅医療についてもっと知ってもらおうと今回、在宅医療に取り組む6人にお話を伺うことになった。第一回は「本郷クリニック」(内科・外科)の牧篤彦先生。



本郷クリニック 牧先生

高齢者が病気になった際、最初は「かかりつけ医」の病院に通院し治療するが、最後は足腰が弱り寝たきりとなる。

◇

以前から家族に付き添われてかかりつけ医の外来に通院していた高齢のAさん。徐々に足腰が弱くなり通院が難しくなった。そこでかかりつけ医に相談すると、訪問診療で治療を継続できることが分かった。Aさんは安心して在宅医療に移行し、最期は家族の見守

ケース1

なる。人生を終えるにあたり、日本人の7割以上が「自宅で最期を迎えたい」と望んでいるという調査結果もある。最期をいかに迎えるか。

る中、大往生した。

誰もがピンピンコロリと逝けるわけではない。多くの人は高齢とともにフレイルが進行し寝たきり状態となり最期を迎える。

「フレイルとは活動量や筋力の低下等により、一人で生活することが困難になりかけている状態を指します。普段から介護予防を意識して過ごしつつ、将来寝たきりになった場合についてかかりつけ医に相談しておくことが大事です」と牧先生。

かかりつけ医がいなかったり訪問診療をしていない場合、「はち丸在宅支援センター」(☎760・0874)で相談ができる。例えば脳梗塞で総合病院に救急搬送された場合、そこでの急性期治療が一段落すると、在宅療養やリハビリテ

ーション病院(入院期間160日〜150日以内)への転院等、退院調整が必要になる。在宅医療を望んでも、その場で訪問診療を提供できる主治医を探すのは難しい。かかりつけ医が訪問診療に対応しているところあらかじめ分かっている場合は、病院に申し出ることで退院調整がスムーズになる。

「だからこそ、どこで、どのように人生の最期を迎えたいかを家族と一緒に考えておくことが大切なのです」と牧先生は語った。

70年前は8割以上の人が自宅で死を迎えたが、今では逆に病院で亡くなる人が約8割に達する。そして今、多くの人々の希望に添えるべく、在宅みとりを可能にするさまざまな体制が整いつつある。介護保険が登場して20年、名東区内ではこの10年で在宅医療の体制が整ってきた。緩和ケアなどの技術が上がり、在宅医療で可能になることが増えた。病院でなく暮らしの場で患者を診ることは「医師が患者の状態をより知ることができる」というメリットもある。

しかしかかりつけ医一人だけで、24時間365日患者に対応することは不可能だ。在宅医療は、かかりつけ医同士の連携の他、大病院やデイサービス・ヘルパー・訪問看護等がチームを組んで提供される。

名東区は医療従事者同士が顔の見える関係性を築く努力を続け、今では「オール名東」として強力に在宅医療を支えている。元気なうちにこそ、自分たちが



在宅医療についてのパンフレット右と中央は、はち丸在宅支援センター置いてある。左は全戸配布されている

ができることは始めておきたいものである。「早すぎる」ということではないようだ。

ができることは始めておきたいものである。「早すぎる」ということではないようだ。